

## 鉄道・電気事業からみた近代宇治の都市イメージ形成\*

### The image of Uji City based on the infrastructure under the modernization

田中尚人\*\*・川崎雅史\*\*\*・坪田 樹\*\*\*\*

by Naoto TANAKA, Masashi KAWASAKI and Tatsuki TSUBOTA

This study focused on the development of Uji City under the modernization before the consolidation in 1951. Before modern age, this area had been famous for the sightseeing and the tea plant. Under the modernization, some infrastructures such as road systems, railway systems and electric generation systems were constructed in this area, and had consisted or sustained the image of this area.

This study analyzed the influence of infrastructure toward urban landscape, urban life and the image of the city, and then clarified the city planning and management of the Uji City on the process of the modernization. The image of Uji City itself was not made revolutionized by the infrastructure, but elements of the image were updated taking advantage of the infrastructure. Therefore, the image of Uji City constituted before modern age have been succeeded.

#### 1. 序論

##### (1) 研究の背景と目的

個性溢れた魅力ある都市経営のために、風土に根ざした景観や名所、物語、土産などによる基盤的な都市の特徴づけまたは都市文化の理解、そして内発的な都市イメージ形成について考えることは有益である。本論文で取り扱った「都市イメージ」とは、ある時代、ある都市における、景観や人々の生活のあり方を規定するような、共通認識（市民のみならず、周辺の地域の人々にも共有される）となった概念や価値観とする。

筆者は、リンチが示した「都市のイメージ」<sup>1)</sup>は、主に操作可能な空間的要素（地形やインフラストラクチャー、建築物など）に対して人々が持つ都市空間の認識の構造を明らかにして、人々の内面的な、解釈者としての都市イメージの形成について言及したものであったと考える。本研究では、この都市イメージを支えてきたインフラストラクチャーの変遷を整理し、一定期間醸成されることによって都市自身から発信される内発的なイメージについて考察した。例えば、宇治市役所のWebサイト (<http://www.city.uji.kyoto.jp>) には「お茶と源氏物語のまち」宇治市という都市イメージが記載されており、この「お茶」や「源氏物語」は、ある時期に宇治にもたらされた都市イメージの構成要素であったが、長い年月を経

て現在都市宇治のアイデンティティとして定着し、情報発信されている内発的な都市イメージである、と考える。

本研究は、明治から大正期にかけて実施された鉄道敷設や電気事業などのインフラストラクチャー整備が、都市景観や人々の都市生活に与えた影響を分析することにより、近代化プロセスにおいて、近代都市宇治がどのように形づくられたのか、また都市イメージを形成したのかを明らかにし、今後のインフラストラクチャー整備に活かすことを目的とする。特に近代化に着目したのは、近世以前の日本の風土には無縁であった技術や空間、思想が移入される過程において、都市宇治がそれらをどのように受容し、対応（受動、継承、拡張など）したのかを解釈することが、都市のアイデンティティを創出し育む指針として重要であると考えたからである。

##### (2) 既往研究と本研究の位置づけ

既往研究として、鉄道駅と都市形成の関係を考察した北河の研究<sup>2)-3)</sup>、為国らの研究<sup>4)</sup>がある。電気事業と都市形成に関する研究としては、街路空間に焦点を当て都市構造や人々の感覚への影響を考察した研究<sup>5)</sup>がある。

本研究は、歴史的文献や史料を整理・分析することにより、インフラストラクチャーと都市形成の関係のみならず、地形的・文化的要素からなる都市イメージとの関係を扱ったことを特徴とする。

基礎的文献として、関西圏の鉄道一般のもの<sup>6)</sup>、都市生活と鉄道との関係を記したもの<sup>7)</sup>がある。その他、基礎的な史実は、京都について<sup>8)-12)</sup>、宇治について<sup>13)-21)</sup>、鉄道について<sup>22)-25)</sup>、電気事業について<sup>26)-31)</sup>、など章末に列挙した参考文献に基づいて記述した。

\* Keywords : 都市イメージ, 近代化, 鉄道, 電気事業

\*\* 正会員 博士 (工) 岐阜大学工学部社会基盤工学科講師  
(〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1 : naotot@cc.gifu-u.ac.jp)

\*\*\* 正会員 博士 (工) 京都大学大学院工学研究科助教授

\*\*\*\* 学生員 学士 (工) 京都大学大学院工学研究科修士課程

### (3) 研究対象地と調査手法

本研究では、1951年(昭和26)の久世郡宇治町、横島村、小倉村、大久保村と宇治郡東宇治町の大合併による宇治市誕生以前の久世郡宇治町を対象とした(図-1)。

この地域では、近世以前から名所遊覧と茶業で賑わい、明治・大正期には鉄道敷設や電気事業などのインフラストラクチャー整備が実施された。本研究では特に、この宇治を都市として特徴づけてきた名所と茶に焦点を当て、宇治の近代化について文献・史料調査、ヒアリング調査、現地踏査を行った。都市イメージの抽出については、可能な限り一次資料でイメージを表現しうる文章表現やヴィジュアル資料を用いたが、解釈に用いる情報としての精度であり、二次資料も含まれる。

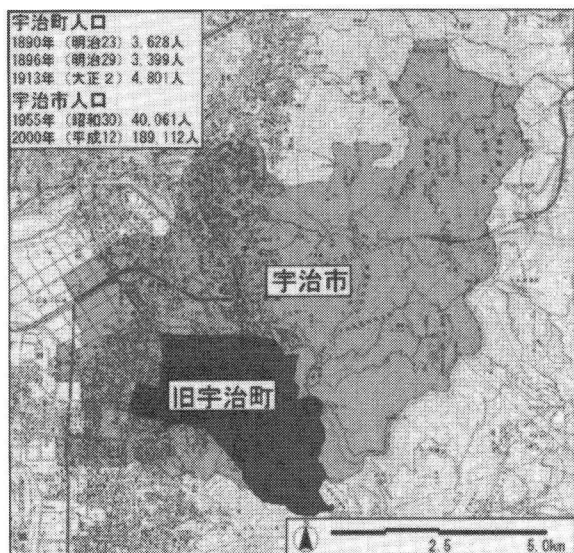


図-1 研究対象地宇治

(『宇治市史4:1978.2』の記述事項を参考に筆者作成)

## 2. 近世宇治の都市イメージ形成

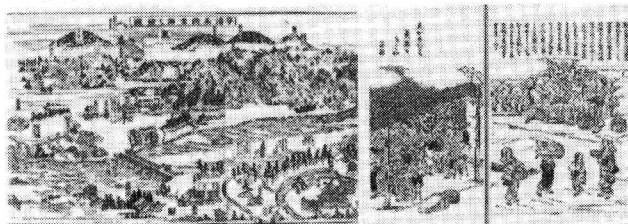
本章では絵図や古地図、史料を分析して、近代化以前の近世宇治の都市イメージを抽出した。

### (1) 宇治の名所

古代より和歌に詠まれた宇治川を中心とする山河の美は、中世には交通の要衝であったので別業の地として既に有名であった。封建制度下での理由のない物見遊山は許されず、庶民の旅は信仰に基づく伊勢参宮や京・大和への寺社参詣などに限られていた。平等院や興聖寺、宇治神社などを有する宇治にも多くの巡礼者が訪れ、平等院鳳凰堂の扉壁には全国から訪れた参詣者の証として居住地の落書きが残っているという<sup>32)</sup>。源氏物語により活写され、物見遊山が文化として根付き始めた近世には、名所図(図-2参照)や名所案内などのメディアによって広く人々に紹介され、都市「宇治」の名は全国に知らしめられた。そこに描かれた山河の美や寺社が創り出す風雅は、宇治の都市イメージの基盤として存在していた。

### (2) 茶所宇治

梅雄茶に次ぐ茶の産地として12世紀以来茶の栽培を行ってきた宇治は、15世紀になると巨椋池を介した宇治川の舟運など交通の便や宇治茶師が編み出した独特の覆下栽培などの技術革新によって質・量共に日本随一の茶産地となった。茶師である上林家が世襲代官に任命され、ひたすら茶栽培に努める特異な地域であった。明治維新という社会の激動期においても茶の品質を守り、茶所(図-3参照)という都市イメージは確固たるものとなった。



左) 図-2 宇治の名所(『宇治名所図会』江戶前期)

出典:『宇治名所図会一旅へのいざない』宇治市歴史資料館編、1998.10より)

右) 図-3 茶摘み風景

(『都名所図絵』出典:『増補京都叢書第十一巻:1934』より)

### (3) 近世宇治の都市イメージ

近代期における宇治の都市イメージの変遷を解釈する前提として、近世までの宇治の都市イメージを支えた要素を整理すると、概略的に以下の2点が挙げられる。

- ・宇治川を中心とする山河の美と、平等院などの寺社が創り出す神秘的な世界(図-4参照)
- ・あらゆるものが茶と結びつき、優良茶を生産する茶一色の世界

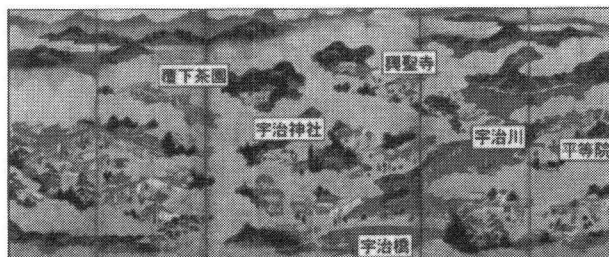


図-4 近世宇治の都市イメージ

(『宇治名所図会』の絵図に地名等を加筆)

出典:『宇治名所図会一旅へのいざない』宇治市歴史資料館編、1998.10より)

## 3. 鉄道敷設による都市イメージの近代化

近代を代表するインフラストラクチャーである鉄道・電気軌道の宇治における整備の概要を整理し、近世以来宇治の都市イメージを形成してきた名所と茶に与えた影響を分析した。

### (1) 宇治における鉄道敷設

宇治には、1896年(明治29)奈良鉄道(現JR奈良線)、



図-5 宇治における鉄道敷設  
(『京都府庁文書：京都府歴史資料館所蔵，1897』  
に駅・路線と文字を筆者加筆)

1913年(大正2)京阪電気鉄道宇治線の2つの鉄道が敷設され、京都と接続された(図-5)。

#### ① 奈良鉄道

1889年(明治22)両都鉄道株式会社により、京都～奈良～櫻井間の鉄道敷設が出願されたが、京都～奈良間のみ仮免許が下付され、奈良において大阪鉄道と連絡するよう命ぜられた。またこの時、「両都鉄道」の名称は不適切とされ、奈良鉄道株式会社と改めた。1895年(明治28)京都岡崎で開催される予定であった第四回内国勸業博覧会までの開通を目指した<sup>33)</sup>。1893年(明治26)本免許が下り、翌年京都より起工された。1896年(明治29)4月に全線が開通、全通時の途中駅は伏見、桃山、木幡、宇治、新田、長池、玉水、棚倉、木津であった。京都～奈良間が1時間半毎の発車で1日11往復、1時間50分前後で結んだ。

奈良鉄道の敷設目的は当初から京都～奈良そして大阪鉄道との接続による大阪へのアクセスの確保、京阪間の旅客貨物の増加を期待した都市間連絡型交通であり、駅間隔が広く運行頻度も低かったため沿線である宇治の都市開発への影響は少なかった。

#### ② 京阪電気鉄道宇治線

1906年(明治39)伏見～宇治間に宇治電気軌道株式会社の敷設が出願され、翌年認可された。しかし容易に着工の見通しがつかず、この宇治電気軌道の敷設権を宇治への進出を望んでいた京阪電気鉄道株式会社が1910年(明治43)に譲り受け、標準軌間を採用し、国鉄奈良線

の北側としていた終点宇治駅を、奈良線の築堤を貫通して宇治橋の直近まで延長する変更を行った。

ルートとして中書島から宇治川を渡り、横島を経て宇治へ至る西岸線と、中書島から六地藏～木幡～黄檗を経て宇治へ至る東岸線が比較検討された。建設費の軽減を重要視し西岸案が採択されたが、1912年(明治45)7月明治天皇が崩御、その陵墓として伏見桃山城址が選ばれたため宇治線は参拝者輸送の使命を帯びることとなり、東岸線に変更された<sup>34)</sup>。1913年(大正2)6月に中書島～宇治間が開通し、翌年には五条～宇治間の直通電車の運行を開始した。また1915年(大正4)に京阪本線が三条まで延伸し、1923年(大正12)には三条～宇治間に直通電車が運行された<sup>35)</sup>。

京阪宇治線はおよそ中書島から宇治まで8kmの間に5つの途中駅があり、運行頻度も高かった。そのため宇治を含む沿線住民の足としての機能を持ち、また中書島で京阪本線に連絡することで、京都・大阪両都市と繋がり都市郊外連絡型交通であったと言える。

#### ③ 両鉄道の都市イメージ形成に対する役割

上記のように比較分析した結果、ほぼ同じ路線を選定したにも関わらず、敷設の目的及び駅形式において、京都～奈良間の旅客・物流の接続を意図して宇治には中間駅しか設けなかった奈良鉄道と、観光を主軸に宇治への集客を意図した終端駅を設けた京阪電気鉄道宇治線という特徴が明らかとなった。両者ともに、京都、奈良、大阪といった大都市から宇治へのアクセス向上に寄与したことは明らかであるが、「京都郊外の日帰り可能な観光地」という宇治の都市イメージを積極的に創出し外部に発信したのは京阪電鉄、大阪や奈良などの周辺都市からの心的距離を縮めその都市イメージをより遠方まで広げたのは奈良鉄道、であったと解釈される。

以下、(2)～(4)において、その具体的な都市イメージの形成について分析を行った。

#### (2) 名所遊覧の近代化①一駅施設

近代期の宇治における鉄道の路線選定や駅設置に際しては、近世以来宇治の都市イメージの重要な要素となっていた宇治川を中心とする山河の美が意識されていた。

例えば、当時の新聞にも「宇治川を渡る鉄橋は宇治橋の下流にほとんど接近する計りに架られ(中略)鳳凰堂は山水林樹の間に聳え興照寺は琴谷を隔てて隠見す蜚りにも遊ぶべく縣祭りにも便なるべし、蓋し線路中最も絶景の所」<sup>36)</sup>と紹介され、奈良鉄道の宇治川を渡る鉄橋は宇治橋と平行に架けられ、名景とされていた宇治橋から見る宇治川上流の景観を、鉄道の車窓からも眺められるよう工夫されていた(図-6)。

京阪宇治駅は宇治橋東詰に設置され、駅を出れば宇治橋と通園茶屋が目に入り、その向こうには宇治川が流れていた(図-7)。また、駅舎は平等院鳳凰堂を擬して建築された。近代化の象徴鉄道の車窓や駅から、近世からの宇治を代表する景観を眺めることができたのである。

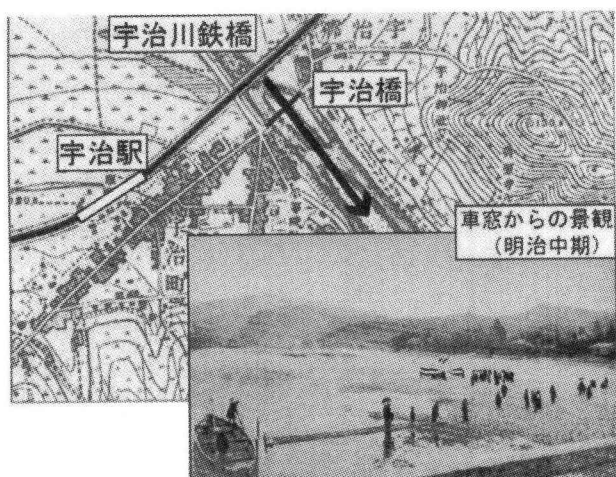


図-6 奈良鉄道と宇治の景観

(1897年発行地形図「宇治」に名称、視線の方向を矢印にて筆者加筆、写真は『写真集成京都百年パノラマ館：1992.7』より)

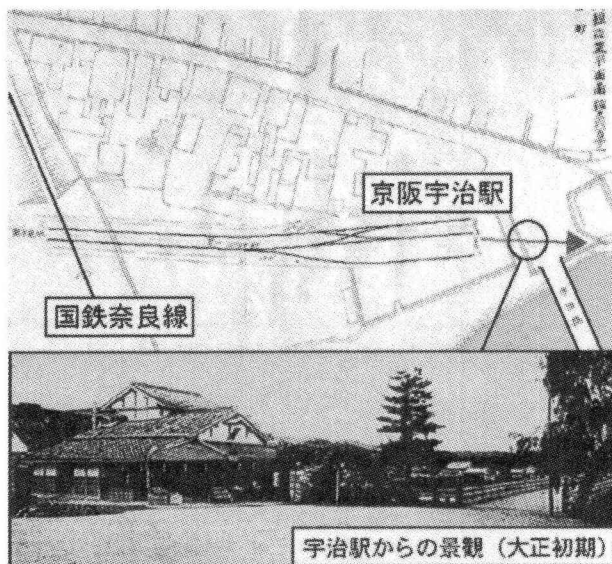


図-7 京阪宇治駅の設置と宇治橋東詰の景観

(地図は「京都府庁文書：1912年」に名称、視線の方向を矢印にて筆者加筆、写真は『京都府久世郡写真帖：1915』より)

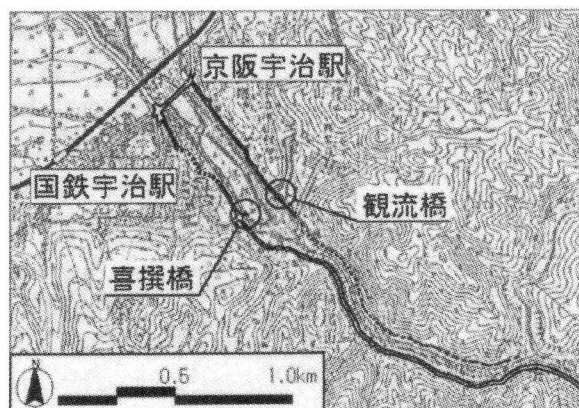


図-8 回遊式遊覧道路の建設

(1925年発行地形図「宇治」に名称を筆者加筆)

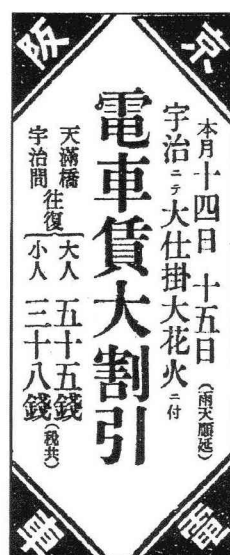


図-9 新聞広告

左) 京阪電鉄割引新聞広告 (大阪毎日新聞、1916.8.12)

右上、下) 『よみがえる鉄道黄金時代 一宇治を走った汽車・電車一：宇治市歴史資料館編、2000.9』より)

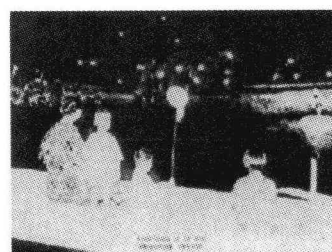


図-10 蜚舟遊覧船

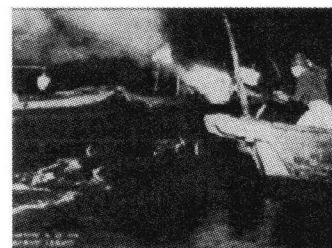


図-11 観光鵜飼

### (3) 名所遊覧の近代化②一周辺開発、イベント

鉄道敷設以後、遊覧列車の運行や公園整備、例えば京阪電鉄による回遊式遊覧道路の建設 (図-8) などが行われ、花火 (図-9)、蜚舟 (図-10) や鵜飼 (図-11) が再開されるなど近世以来の宇治川を中心とする自然を活かした、鉄道会社による積極的なイベントも開催されるようになった。鉄道による時間距離の短縮と名所遊覧のイベント化によって、宇治は京都・大阪などの大都市から日帰りが可能な手軽な観光地となった。

### (4) 宇治茶の広がり宇治の都市イメージ

1892年 (明治25) 小包郵便法が施行された。鉄道を利用した郵便システムであり急速に広まりを見せ、間もなく小包を利用した宇治茶の通信販売が開始された。前年まで減少傾向にあった京都府の製茶産額が増加に転じたのは、通信販売の効果の現れと言える (図-12、図-13)。

1899年 (明治32) の奈良鉄道各駅での小包郵便の取扱量を比較すると、宇治駅での取扱量、特に差出が非常に多くなっている (表-1)。

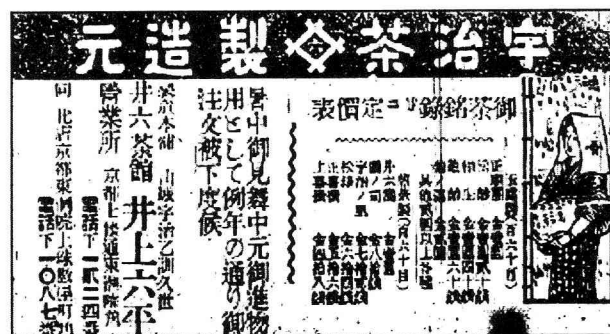


図-12 宇治茶の通信販売新聞広告

(大阪朝日新聞京都付録、1926.2)

鉄道を利用した小包郵便による通信販売は、宇治茶の商圈を拡大し、同時に宇治茶に支えられた宇治の都市イメージの拡大にも貢献したと言える。

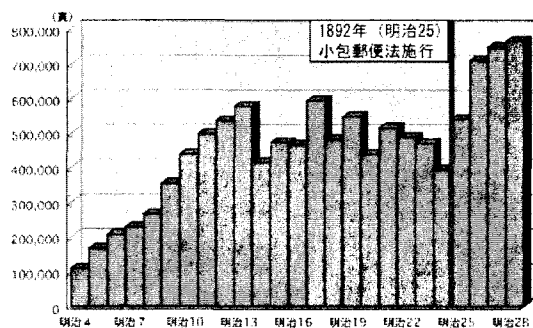


図-13 京都府製茶産額累年比較

『京都府著名物産調：京都府内務部第四課編，1901.1』  
のデータを用いて筆者作成)

表-1 奈良鉄道各駅における小包郵便取扱量  
『明治卅二年度京都郵便電信局統計：1902.9』より)

|    | 差出        |           | 到着        |           |
|----|-----------|-----------|-----------|-----------|
|    | 上り(重)     | 下り(重)     | 上り(重)     | 下り(重)     |
| 京都 |           | 4,645,725 | 1,342,621 |           |
| 伏見 | 2,165,124 | 148,217   | 269,106   | 1,949,753 |
| 宇治 | 2,369,040 | 118,800   | 43,800    | 798,600   |
| 長池 | 101,294   | 15,520    | 11,885    | 195,800   |
| 井手 | 149,108   | 10,438    | 12,320    | 205,505   |
| 木津 | 449,350   | 113,400   | 1,006,970 | 1,416,620 |

#### 4. 電気事業による都市イメージの近代化

近代期に人々の都市生活に最も大きなインパクトを与えたと考えられる電気事業が、近世以来宇治の都市イメージを形成してきた名所と茶に与えた影響を分析した。

##### (1) 宇治における電気事業の展開

宇治には、1913年(大正2)に送電を開始した宇治川電気(現関西電力)と宇治町営電気の2つの電気事業が存在した。

##### ① 宇治川電気

1894年(明治27)京都の発起人より発電用水路の開削が出願された。翌年には大阪、滋賀からも同様の計画が起り、これらは合同して「京阪派」と呼ばれ宇治水電株式会社の名称で発電と舟運兼用の水路の開削を出願した。同年には、「東京派」と呼ばれる宇治川電力株式会社による水路開削の出願もされた。東京派の水路計画は発電と灌漑用を兼ねていた。さらに1898年(明治31)には琵琶湖を経由して敦賀湾と大阪湾を運河で結ぶことを念頭に置いた「滋賀派」と呼ばれる琵琶湖運河株式会社による水路開削が出願された。内務省ではこの競願三者の願書を一斉に却下して合同を勧めた。1901年(明治34)京阪派の計画を踏襲して合同が成り、翌年改めて出願し

た。1906年(明治39)に許可が下り、宇治川電気株式会社は創立したが、淀川改修以前のため舟運の目的は削除された<sup>37)</sup>。1913年(大正2)7月水路及び宇治発電所が竣工し翌月から送電を開始した。京都電燈や大阪電燈、大阪市との間に電力供給契約を結んでおり、京都・大阪双方へ送電した<sup>38)</sup>。

1908年(明治41)には、同地に淀川電力株式会社の水路開削が出願された。既に宇治川電気の水路開削計画が許可されていたが、宇治川の水量に余裕があり治水上支障がないとして認可された。その後両社の対立があったが、1910年(明治43)宇治川電気が淀川電力の水利権を買収するに至った。この水利権を基にして宇治川電気の第二期工事が進められ、1924年(大正13)に大峰堰堤及び志津川発電所が完成した<sup>39)</sup>。

京都や大阪という電気の大消費地の近くに、宇治発電所は1600万円、志津川発電所は1650万円という、当時としては巨額の費用を投じて建設された。さらに1921年(大正10)に近江水電、大和電気、翌年には熊野電気、大正水電を合併し、宇治川電気の勢力範囲は琵琶湖湖東一帯から大和、南紀、神戸にまで及んだ。宇治川電気は、発電した大量の電力を他の電燈会社や自治体に販売する電力供給会社として、京都・大阪などの大都市を中心に広範囲な都市圏の電源の役目を果たしたと言える。

##### ② 宇治町営電気

宇治町営電気は、宇治川電気に遅れること3ヶ月、町営の火力発電所を建設する予定を変更し、宇治川発電から買電して宇治町内に電気を供給する事業に徹した。宇治における発電所建設による風致破壊に対する、宇治川発電から宇治町への補償としての意味合いも強かったと推測されるが、町営電気事業の企図は安く大量に電力を購入し販売できる地の利を活かした町の財源の確保にあった。宇治町は山河の景勝に富み、また茶産地として多くの来訪者があり、宇治川電気の起工後は人口も増加していたが、税外収入は少なく町民には重課となっていたのであった。この町民からの税収以外の収入となる町営電気事業採用による利益として、

- ・製茶業及びその他の工場に電力供給し製造業の発展
- ・各戸に電灯がつけられ、町民生活に役立つ
- ・料理店、旅館、商店などの設備が向上、観光客が増加などが挙げられた<sup>40)</sup>。

創業当初は450戸、1220灯の需用であったが、1921年(大正10)には1000戸、3200灯を越え、料金制度も定額制から従量制の導入や値下げがはかられた。京都など大都市へ送電された宇治川電気の電力は、町営電気により初めて宇治の人々の生活を照らしたと言える。

##### (2) 名所遊覧の近代化①一新名所の創出

宇治川の豊富な水と鉄道による輸送力に加え、電力が容易に得られるようになったことにより、宇治は工場の立地にも適した場所となった。このような工場や発電所により、それまでの名所と茶で代表されていた宇治の都

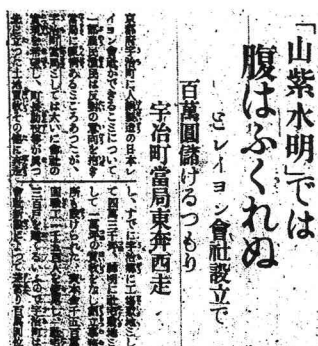


図-14 当時の世相

(『大阪朝日新聞京都付録：1926.2』より)

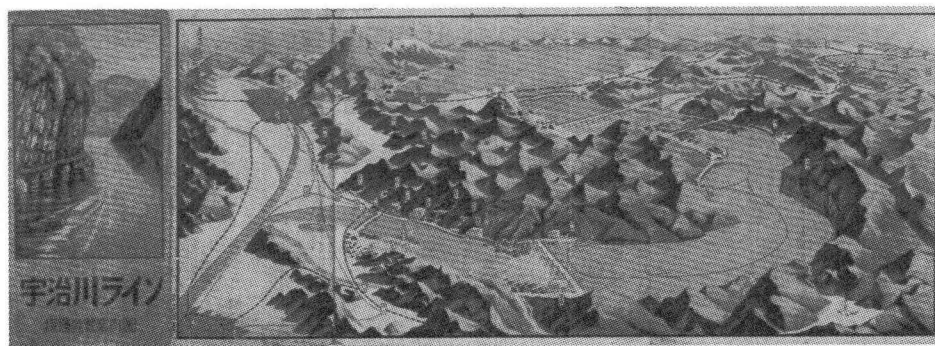


図-15 宇治川ライン (『宇治川ライン探勝遊覧案内図：制作年不明』より)

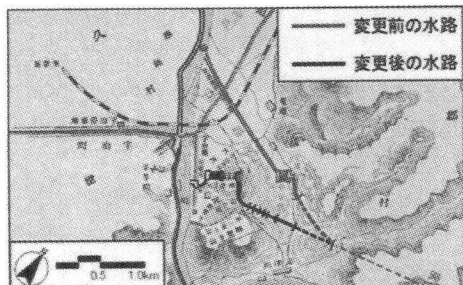


図-16 発電所・水路の変更

(『第一期水力電気事業沿革志附属図譜：1916.10』より)

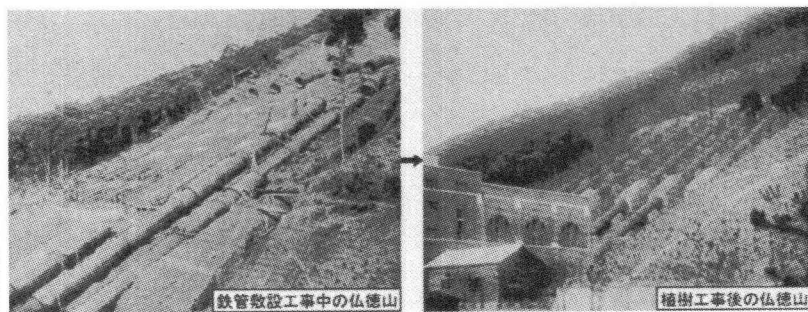


図-17 植樹工事による仏徳山の風致維持

(『第一期工事竣工記念写真帖：1916.4』より)

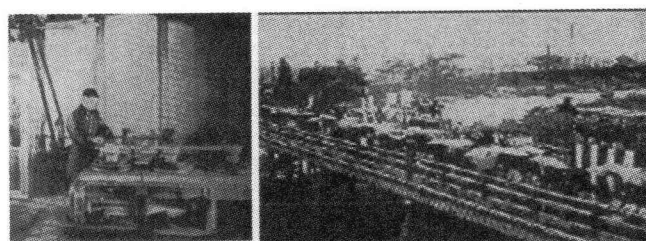
市イメージに、工業都市の色合いも付加された(図-14)。宇治においては、宇治川を中心とする山河の美が近世以来の名所遊覧の主軸ではあったが、電気事業により飛躍的に向上したエネルギー供給は、平等院のライトアップや納涼会、ダム湖に就航した宇治川ライン(図-15)など、電力や発電施設を利用した新名所を次々と創出していった。宇治における名所遊覧は、宇治川周辺の風向や寺社を中心とした近世以来の宇治の自然や文化を愉しむものから、時間的にも空間的にも押し広げられた宇治という空間内に予め用意されたイベントや施設利用などのメニューを来訪者が目的に合わせて選ぶ観光地型へと徐々に変化していった。

### (3) 名所遊覧の近代化②—風致の保全

電力は工業や新名所を生み出したが、発電所建設は森を伐り、山を削る文字通り破壊であった。1907年(明治40)仏徳山の山腹を拓いて貯水池を設置し、西麓に発電所を位置して水路の末端を宇治村から宇治町宇治郷へ変更する申請がされたが、この変更は風致を害するとして京都府より他の適地を探すよう命ぜられた(図-16参照)。これに対し宇治町民は2つの反応を示した。一方は導水管が敷設される仏徳山の風致の破壊や放水口の対岸の水防問題などを危惧した反対運動であり、他方は宇治町の発展のために問題を孕む発電所を敢えて受け入れようとする誘致運動であった。宇治町当局は誘致の姿勢であったようで、山水明媚だけではなく将来の商工業の発展のために発電所を受け入れたいという旨の請願書を知事に提出した。宇治川電気では5つの比較路

線を調査したが、申請の計画に優るものは無いとして貯水池を地下に埋設、1913年(大正2)から1915年にかけて、貯水池築造や鉄管敷設工事により破壊された仏徳山に植樹工事(図-17)を行う対策をとった。こうして不許可に傾いていた計画変更は認可された<sup>41)</sup>。

また、送電線を地下化や鉄塔を暗緑色に塗色し、工場も宇治橋より下流の風景地帯には入らない敷地に建設するなど、宇治の都市イメージを支えてきた山河の美の破壊を最小限に食い止める努力がなされた。



左) 図-18 半機械製茶導入

(『目で見る南山城の100年：1995.11』より)

右) 図-19 第一回茶業記念祭

(『京都府茶業百年史：1994.3』より)

### (4) 宇治茶の継承

近世以前からの手揉みによる製茶は、重労働にもかかわらず生産量は限られていた。機械製茶の品質は手揉みには到底及ばないものであったが、戦争による経済的影響は機械化を促進した。電力を利用した製茶機械が導入されたが、近世以来優良品至上主義をモットーとしてきた宇治では、茶の品質を守るために「半機械製」の製法が採用されるに留まった(図-18)。

便利さを便利さだけでは受け入れず、近世からの伝統に照らし合わせて考えた「半機械製」の導入や、茶の需要増加や振興を主旨とし、1932年（昭和7）から挙行されている茶業記念祭（図-19）によって、宇治の都市イメージを支えた宇治茶の品質は守られ、後世に継承された。

## 5. 結論

### （1）研究の成果

本研究で得られた、都市イメージ形成におけるインフラストラクチャーの役割を、鉄道、電気事業について以下にまとめた。

#### ① 鉄道に関するまとめ

近代を代表するインフラストラクチャーである鉄道は、周辺の大都市との位置関係において宇治の役割を大きく変えた。つまり、宇治市民以外の場所や人々と宇治の都市イメージとを急速且つ強力に結びつける役割を果たし、宇治の都市イメージを空間的に拡張したと言える。また、来訪者の増加や物流の活性化による外部からの刺激により、近世以来都市宇治のアイデンティティである「名所遊覧」や「茶業」は、よりその位置づけが明確になり、インフラストラクチャー整備に反映され人々に強く意識されるようになった。鉄道は他の都市との連結により、宇治の空間的なアイデンティティを意識するきっかけを与え、内発的な都市イメージ醸成に役立った。

#### ② 電気事業に関するまとめ

電気事業は、主に宇治川の豊かな水と宇治の地形を利用して近代の水力発電施設により成立し、宇治の都市イメージに工業（工場）という新しい要素を付加した。名所遊覧や茶業においては豊富な電力供給によりライトアップや施設整備による新しい型の観光や製造法を生み出した。しかし、単に新しい技術、文化を受容するだけではなく、近世以来宇治の都市イメージの基盤であった景観や文化を継承する努力も払われ内発的な都市イメージはより豊かになった。宇治において電気事業は、大都市に対抗するための自然地形を利用した殖産興業だけではなく、近世より受け継いだ空間的、産業的基盤の継承、発展にも寄与し、宇治の都市イメージは近世よりも多岐に拡張されたと言える。

### （2）研究のまとめ

近代化過程における宇治では、鉄道・電気事業といったインフラストラクチャー整備が宇治の都市イメージを一新させたのではなく、インフラストラクチャーの力が巧みに活かされ、近世から受け継いだ都市イメージの構成要素を近代に適合するように変型させ、宇治の都市イメージの継承、拡張に寄与した。インフラストラクチャーにより、近世の空間及び産業基盤の上に景観や文化として現れる都市の個性が維持され、近代宇治は魅力を失うことなく近代化したと言える。

また、宇治の都市イメージを豊かに育んできたのは、都市に住まう市民に他ならない。今後、そうした市民らの都市イメージ形成に対する関与（デザイン行為や文化形成）を明らかにし、インフラストラクチャー史を充実させたいと考える。

## 謝辞

本研究では、多くの方々にお世話になった。上林春松本店の上林春松様、京都府茶業会議所日下正雄様、松本知毅様には貴重なお話を伺った。宇治市歴史資料館の小島正亮様、坂本博司様、宇治市観光協会の北村庄司様には資料の提供や解説をして頂いた。また京都府歴史資料館、京都大学付属図書館の史料の提供を受けた。記して感謝の意を表します。

## 【参考・引用文献】

- 1) ケヴィン・リンチ著、丹下健三・富田玲子訳：都市のイメージ、岩波書店、1968.9
- 2) 北河大次郎：19世紀フランス都市土木計画思想とパリ大改造、土木計画学研究・論文集、No.14、1997.9
- 3) 北河大次郎：近代都市パリの誕生-鉄道建設を通して-、日本鉄道敷設協会誌第39巻2-8号、2001.4-12
- 4) 為国孝敏・榛沢芳雄：鉄道が都市の発展に与えた影響に関する史的研究-渋谷を中心にして-、土木史研究、第12号、pp.65-78、1992.6
- 5) 亀山泰典・田中尚人・川崎雅史：近代京都における電気事業と街路空間形成に関する研究、土木学会土木計画学研究・講演集、第24号、講演No.5、2001.11
- 6) 田中真人・宇田正・西藤次郎：京都滋賀 鉄道の歴史、京都新聞社、1998.11
- 7) ヴォルフガング・シヴェルプシュ：鉄道旅行の歴史、法政大学出版局、1982.11.20
- 8) 京都市参事会：京都名勝記、五車楼書店、1903.4
- 9) 京都市役所：新撰京都名勝誌、京都市役所、1915.10
- 10) 野中凡童：大京都誌、東亜通信社、1932.8
- 11) 増補京都叢書刊行会：増補京都叢書、1934
- 12) 京都府茶業百年史編纂委員会：京都府茶業百年史、京都府茶業会議所、1994.3
- 13) 林家辰三郎・藤岡謙二郎：宇治市史1 古代の歴史と景観、宇治市役所、1973.1
- 14) 林家辰三郎・藤岡謙二郎：宇治市史2 中世の歴史と景観、宇治市役所、1974.3
- 15) 林家辰三郎・藤岡謙二郎：宇治市史3 近世の歴史と景観、宇治市役所、1976.3
- 16) 林家辰三郎・藤岡謙二郎：宇治市史4 近代の歴史と景観、宇治市役所、1978.2
- 17) 林家辰三郎・藤岡謙二郎：宇治市史年表、宇治市役所、1983.8
- 18) 京都府久世郡役所：京都府久世郡写真帖、京都府久世郡役所、1915.12
- 19) 若原英式：目で見える南山城の100年、郷土出版社、1995.11
- 20) 宇治市歴史資料館編：宇治名所図会-旅へのいざない-、1998.10
- 21) 宇治市歴史資料館編：よみがえる鉄道黄金時代-宇治を走った汽車・電車-、2000.9
- 22) 鉄道省：日本鉄道史中篇、鉄道省、1921.8
- 23) 鉄道省：日本案内記 近畿篇上、鉄道省、1932.3
- 24) 京阪電気鉄道株式会社史料編纂委員会：鉄路五十年、京阪電気鉄道株式会社、1960.12
- 25) 京阪電気鉄道株式会社：京阪七十年のあゆみ、京阪電気鉄道株式会社、1980.4

- 26) 宇治川電気株式会社：第一期水力電気事業沿革志，宇治川電気株式会社，1916.10
- 27) 宇治川電気株式会社：第一期水力電気事業沿革志図譜，宇治川電気株式会社，1916.10
- 28) 宇治川電気株式会社：第一期工事竣功記念写真帖，宇治川電気株式会社，1916.4
- 29) 林安繁：宇治電之回顧，株式会社宇治電ビルディング，1942.12
- 30) 二十五年史編纂委員会：関西電力二十五年史，関西電力株式会社，1978.3
- 31) 関西地方電気事業百年史編纂委員会：関西地方電気事業百年史，関西地方電気事業百年史編纂委員会，1987.10
- 32) 前掲文献15)，pp. 428-429
- 33) 前掲文献6)，p. 82
- 34) 前掲文献16)，pp. 257-259
- 35) 前掲文献17)，pp. 523-541
- 36) 大阪朝日新聞京都付録，1896.1.29
- 37) 前掲文献26)，pp. 1-25
- 38) 前掲文献31)，pp. 119-121
- 39) 前掲文献16)，pp. 241-242
- 40) 前掲文献16)，pp. 243-244
- 41) 前掲文献16)，pp. 238-240